

第10回日本禁煙学会学術総会を終えて

第10回日本禁煙学会学術総会 大会長

尾崎治夫

私「タバコを吸う人はね、いまや2割なんだから、そろそろこの店も禁煙にしたらどうかな。せっかく旨い料理を出す、いいお店なんだし。従業員もタバコの煙をずっと吸わされていると病気になるよ。」

女将「でも先生、まだ2割は吸っているんでしょう。お客さんて、食事をしている間に吸いたくなるみたいなんですよ。私たちもサービス業だし……。」

いやはや、これがこの国の平均的な飲食店を営んでいる経営者の感覚なのである。よく気が付くし、如才ない頭のよい女将だと思っていたのだが、タバコに対する感覚はこんなものである。

1,100名を超える方にお越しいただき、熱気溢れる会場で大いに盛り上がった禁煙学会総会。確かに、世の中の喫煙に対する考え、タバコの手、受動喫煙の手に対する認識が変わってきていることは事実だと思ふ。多くの会員をはじめ、禁煙に関心のある方もそう感じたに違いない。厚生労働省による受動喫煙防止の法的整備のたたき台案も出て、塩崎厚生労働大臣も「世界最低レベルの受動喫煙対策」と、我が国のタバコ対策に対する甘い認識を示し、法案の成立に向け厳しい態度で臨む決意表明をした。さらに東京都知事が、受動喫煙防止条例制定を一部の都議の抗議で即座に引込めてしまった舛添知事から小池百合子知事に代わり、長年断られていた禁煙学会への後援許可も即座に下り、私にも「しっかりとした受動喫煙防止対策を東京オリンピック・パラリンピックに向けてとっていく」と約束してくれている。

しかしながら、ごく普通の巷の飲食店では、冒

頭のような認識で生きている人々が、ほとんどである。また、「精魂こめて出す料理をタバコの煙で汚してもらいたくない。本当は、自分の店の中ではタバコを吸ってもらいたくない」と考えるオーナーも少なからずいることも事実で、「先生是非、法的にお店の中で吸えないようにして下さい。なかなか自分の店だけ禁煙ですとは言にくいんですよ。」という声もよく耳にする。

日本人という国民性は、トップダウンの政策に弱く、とやかく言っても、一度法律で決めてしまふときわめて従順に従う国民性である、というように私は認識している。ということで、東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、今までの開催国がきちんと守ってきたように、法的整備のもと、タバコフリーの都市でのスポーツの祭典の開催を迎えなければならないという外圧を活かすことが千載一遇のチャンスである。東京都も、受動喫煙防止のしっかりとした流れを絶やすことなく、守ってもらいたいし、守らなければいけない。そのためには、タバコの手を認識していない多くの人々に、これからどのようにアプローチをして世論形成をしていくか。まだまだ、タバコ業界や飲食関連団体の抵抗は続くに違いない、多くの飲食店を利用する都民の強い世論の後押しのもと、世界に恥ずかしくない、しっかりとした受動喫煙防止の法的整備が行われるよう、みんなでぶれることなく目指していくことが、今後の禁煙学会の果たすべき大きな役割ではないかと考える次第である。

会員の皆さん、これからも一緒に禁煙活動を盛り上げていきましょう。